

# 中国雲南省における少数民族地域の変化

## —花腰傣の村を事例として—

張 貴 民 (愛媛大学教育学部)

### I. はじめに

中国では漢民族と55の少数民族が暮らしている。2000年に行われた人口センサスの結果によれば、雲南省は総人口に占める少数民族の割合が33.4%で、全国で7位である。少数民族の人口数から見ると、雲南省は広西壮族自治区(1,683万人)に次ぐ全国の第2位(1,416万人)の少数民族の多い地域である。また、民族自治地方の面積は雲南省の国土面積の70.2%に及んでいる。雲南省は典型的な少数民族地域といえよう。

雲南省には彝族・白族・哈尼族・壮族・傣族・苗族・回族など25の民族がある。また、全国の少数民族のうち、特に徳昂族・哈尼族・基諾族・阿昌族・拉祜族・傣族・景頗族・布朗族・普米族・佤族・怒族・僳僳族と納西族は95%以上の人口が雲南省に集中している。

雲南省の少数民族は、マクロスケールでは各民族が入り交じって混住し、モザイク状になっているが、ミクロスケールでは、各少数民族が集中して居住している傾向がみられる。それぞれの民族は自らの居住地域がある。例えばチベット族は北西部の4,000m級の高地に分布し、怒族は西部の起伏の激しい山地斜面に密集している。独龍族は独龍河谷に、傣族は南西部の壩子と称する盆地に、壮族は南東部の石灰岩台地に集中して暮らしている。壮族語系の民族は低緯度の熱帯・亜熱帯の河谷に多い。西双版纳・徳宏・臨滄等の地域では、傣族は500m~1,000mの所に多く分布し、それより高い1,500m前後の中山間地には布朗族・哈尼族・景頗族・亜昌族・佤族が居住している。一方、文山壮族苗族自治州と紅河哈尼族彝族自治州の両州では、傣族が標高1,000m前後の所に、瑤族と彝族の一部は1,500m前後の所に、そして苗族・哈尼族と一部の彝族は2,000m前後の高山地域に暮らしている。また、標高2,000mの壩子と呼ばれる盆地に白族・回族・納西族・蒙古族が居住し、それより高い山地に彝族と一部の白族が、更に上の高山地域に苗族・彝族と僳僳族が分布している。

このように、雲南省における多様な自然環境は、少数民族に多様な生活の場を提供し、居住地の選択を模索する段階に棲み分けの選択肢を提供した。同時に、少数民族は能動的に自然環境に適応し、それぞれの生業形態を確立し栄えてきた。

本稿では少数民族の中でも独特な歴史と文化を持つ傣族に焦点を当ててみる。傣族の中でも、花腰傣と呼ばれている人々の暮らす村を取り上げて、その自然と民族を概観し、生業・農村景観・住居・民族衣装などの変化を述べる。現地調査による事例農家の農業経営や出稼ぎの現状も明らかにする。

### II. 傣族とその分布

中国国家统计局(2009)の統計によれば、中国の傣族は99%が雲南省に集中し、その人口は115.9万人である(2000年現在)。

傣族と言えば、西双版纳傣族自治州の高床式住居(竹楼)に暮らし、稲作を営み、水かけ祭りで有名である。しかし、多様な自然条件に恵まれた雲南省においては、帯状に分布する傣族の地域と点在する傣族の地域がある(羅, 2007)。それは雲南省南西部に広がる2つの相対的に密集している地帯、つまり、1950年代に設立された西双版纳傣族自治州と、徳宏傣族景頗族自治州である。このほかに、小範囲の分布地域として、傣族と他の少数民族で連合した自治県がある。もう一方、他の民族地域に点在する傣族の地域は、雲南省129県(市・区を含む)の約半分の県の農村地域に傣族の居住区がある。傣族は自らの言語や文字を持ち、独自の伝統・習慣・宗教信仰・生活様式を持っている。他の民族と雑居することが減多になく、傣族だけの自然集落を形成している(羅, 2007, pp21-22)。

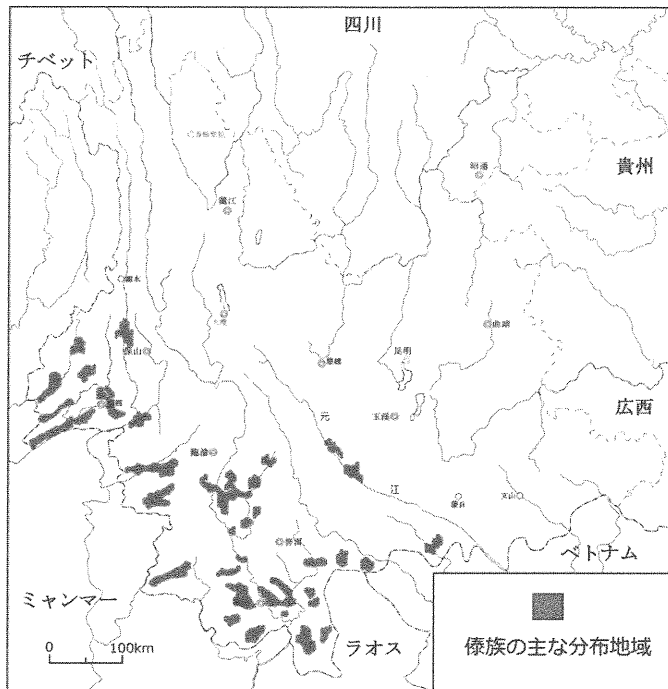


図1 雲南省における傣族の主な分布地域  
 (『民族工作手冊』編集部(1985)より作成)

図1によれば、傣族の主な空間分布は雲南省の南部と南西部に集中していることが分かる。主に西双版纳傣族自治州、徳宏傣族景頗族自治州、耿馬傣族ワ族自治県、孟連傣族ラフ族ワ族自治県、新平彝族傣族自治州、元江哈尼族彝族傣族自治州、双江ラフ族ワ族ラ族自治県、景谷傣族彝族自治州、金平苗族ヨオ族傣族自治州に分布している。

傣族は古越人「滇越」の末裔である(趙, 2007)。紀元前、大理・保山・臨滄・西双版纳などに暮らし、その後「鳩僚」と呼ばれ、その主な分布範囲は次第に図1に示したようになった。傣族は自分の民族言語と文字を持ち、小乗仏教を信仰している。1950年代初期までに一部の地域には封建農奴制度がまだ残存し、その後の社会改革によって農奴制度が消滅した(中国大百科全書総編集委員会『中国地理』編集委員会, 1993)。

傣族はその居住地域の自然環境によって分化しそれぞれの地域に適した生業と文化を形成してきた。傣族は「傣」を自称しているが<sup>1</sup>、羅(2007, 22p)によれば、傣族はその地域によって、「傣泐」、「傣那」、「傣訥」、「傣綳」、「傣雅」、「傣格」、「傣皓」、「傣朗姆」、「傣羅」、「傣亮」、「傣良」などの異なる称呼がある。

### Ⅲ. 南碱村における花腰傣の生業とその変化

#### 1. 調査対象地域の概要

新平彝族傣族自治州(以下、新平県という)は雲南省の省都昆明市から南西方向へ176kmのところりに位置している。県の西部には哀牢山が聳え立ち、東部には磨盤山と迤岨山があり、中部には元江(紅河の上流で、新平県内では戛洒江という)は北北西から南南西へと縦貫している。「両山対峙、一水中分」の地勢になっている。もっと広いスケールでみると、元江は地質的に雲南高原と西部の横断山脈の間にある断層谷に位置している(童・陳, 2007)。元江の侵食と運搬作用によって、河川に沿う細長い河谷斜面が形成され、集落と農業活動に空間を提供している。

哀牢山の主峰である大磨岩峰が海拔3,165.9mで、県内で最も高い。一方、漠沙鎮の南蒿村の海拔が422mで、県内で最も低いところである。県内の標高差は3,500m以上に達して、標高差による気候の差異が顕著である。亜熱帯気候帯に属するが、標高差の影響によって気候帯は、河谷壩子<sup>2</sup>・高温区・半山暖温区と高山寒温区に区分することができる。つまり、きわめて狭い範囲において一日で異なる季節と景観を体験できる。年平

均気温17℃で、年間降水量は946mm、年日照時間は2,230時間で、無霜期は312日である。

新平県の総面積は4,223km<sup>2</sup>で、2005年の人口は27万人（中華人民共和国民政部、2006）。彝族・傣族・漢族・哈尼族など17の民族からなり、少数民族は県総人口の70%を占めている（新平県文化事業局・新平県文学芸術界連合会、2005）。

新平県の傣族は多くの文化的事象において、西双版纳傣族自治州と徳宏傣族景頗族自治州の傣族とは明らかに異なるために、「第3の傣族」と称されている（張、2000）。また、劉（2006）は新平県において、花腰傣の社会文化などに関して詳しく述べている。新平県の傣族の人口は4.2万人で、主に元江河谷の漠沙鎮・腰街鎮・戛洒鎮と水塘鎮に集中している（新平県文化事業局・新平県文学芸術界連合会、2005）。ここは著名な哀牢山の奥地に位置し、山地あり河川あり、元江流域における傣族文化の中心地である。いわゆる「第3の傣族」は、その独特な衣装（とくに腰部の装飾）から「花腰傣」と呼ばれているが、彼らは自らのことを「傣卡」、「傣雅」と「傣洒」<sup>3</sup>と自称している（新平県旅游局、2005）。

南碱村が所在する腰街鎮は花腰傣の多い町である。

新平県政府の資料によれば、腰街鎮の人口は14,110人で、そのうち農業人口は13,212人である（2002年）。彝族・傣族・哈尼族・拉祜族・回族・白族・壮族・苗族など8の民族からなり、少数民族の人口が12,237人で、腰街鎮の総人口の86.7%を占めている<sup>4</sup>。腰街鎮は地形が複雑で、中心地の海拔が1,040mであるが、町全体の標高差は2,000m以上に達しており（最高点2,644.6m、最低点は451m）、気候の垂直的变化は顕著である。農民1人当たりの耕地面積は1.84畝である。

## 2. 南碱村の自然と生業

ここでは新平彝族傣族自治州景頗県腰街鎮曼蚌村民委員会南碱自然村（以下南碱村という）を事例として、現地調査の結果を中心に少数民族地域の生業の変化を述べて、その要因を分析してみる。現地調査は2009年8月と2010年8月の2回で行なった。

図2は南碱村とその周辺の自然環境を示したものである。地図は民国34年（1945年）に測量した地図に基づき、1946年に編集発行されたものである。地形図にRED RIVER (YUAN CHIANG) と記されている紅河<sup>5</sup>は深く侵食し、その両側に短い河川も発達し、河川地形が発達している。河谷の斜面に集落と農地が分布し



図2 南碱村とその周辺の自然環境  
(AMS 1946年 CHINA 1:250,000 NING-ERH (PUERH) より一部改変)



写真1 南碱村の鳥瞰写真  
(元江の左岸、標高777mのところから、2010年8月、張撮影)

ている。南碱村は紅河の河谷の斜面に立地している。村の農地がその周辺に分布している。

南碱村は県庁所在地の桂山鎮から省道306で南西へ43kmのところ、元江の河谷斜面に位置している(写真1)。写真は元江の左岸で、標高777mに登った場所から撮影した南碱村の鳥瞰写真である。写真の奥(西方向)に霞んで見えるのが著名な哀牢山脈である。山麓の低い斜面にいくつかの村寨が見える。手前に北から南へ流れている赤色の河川は元江である。集落のすぐ北に横切る小川は曼蚌河である。哀牢山脈の東麓から東へ流れるこの河川は元江の支流である。村周辺の急斜面に亜熱帯の木に覆われている。村外に野生木綿が生い茂っている。また貴重な野生稻(*Oryza meyeriana*)が群生しているのも発見されている。このように南碱村は山と川と森に囲まれた自然豊かな村である。河川沿い、集落の中、また神林や神山には樹齢の長い大木をたくさん見ることができる。

南碱村は雲南省でも最も乾燥し暑い元江の河谷に位置し、乾燥高温な気候である。海拔が約480mである。最高気温が42℃(5月)、最低気温が15℃、年平均気温が22℃である。年間積算気温は7,500℃で、年に9ヶ月間は高温期である。また年間降水量は700mm~900mmで、主に5月~9月に集中している(王、2008、p3)。

## 2. 農家と農業経営の変化

南碱村は数百年の歴史があり、今まで純粋な花腰傣の村として発展してきた。南碱村の花腰傣は「傣卡」と自称する(王、2002)。「傣卡」とは漢民族と融合してできた傣族のことである。2009年8月、現地での聞き取り調査によると、数年前に別の村から哈尼族出身の女性が南碱村の花腰傣の青年と結婚し村に嫁いできた。今の南碱村は花腰傣と哈尼族の2つの少数民族が暮らしている。

南碱村の総面積は625km<sup>2</sup>である(王、2008、p3)。耕地面積は496畝で、そのうち、水田は212畝、畑は284畝である。主に水稻・サトウキビ・レイチ・野菜などを栽培している(役場での聞き取り)。1998年の統計によれば、南碱村の食糧の収穫量が182万kg、サトウキビの収穫量が1,020 t、農業収入が56万元、1人当たりの年収が2,157元であった(王、2002)。筆者が2010年8月に実施した聞き取り調査によれば、農民1人当たりの年収は3,000元以上に達しているという。ただし、家族構成や出稼ぎの有無によって、農家間の収入の開きが以前より大きくなった。

農業生産請負制の導入初期、農民の収入を増やすため換金作物であるサトウキビの栽培範囲を山の斜面まで広げたため、自然の植生が破壊され、土壌侵食を招

表1 南碱村における農家の農外就労と進学に伴う外出状態

番号	人口数	男	女	農外就労の状態と就学の状況
N J 01	4	2	2	世帯主が県内で出稼ぎ
N J 02	5	2	3	世帯主が県内で飯店経営
N J 03	3	1	2	世帯主が県内で飯店経営
N J 04	8	3	5	二男が上海で出稼ぎ、その妻が哈尼族
N J 05	4	2	2	長男が大学生
N J 06	2	2	0	世帯主が村で竹細工
N J 07	6	4	2	世帯主が村で刺繍
N J 08	3	2	1	世帯主昆明で出稼ぎ
N J 09	4	2	2	世帯主が村で刺繍
N J 10	6	2	4	弟が県内で出稼ぎ
N J 11	5	3	2	世帯主が上海で出稼ぎ
N J 12	6	3	3	長男が上海で、次女が昆明で出稼ぎ
N J 13	5	3	2	世帯主が県内で内装店経営
N J 14	3	1	2	世帯主が輸送業経営、長男が県内で出稼ぎ
N J 15	5	2	3	世帯主が県内で飯店経営
N J 16	4	2	2	長男が昆明で出稼ぎ
N J 17	4	2	2	長男が大学生、長女が県内で出稼ぎ
N J 18	6	3	3	世帯主が県内で飯店経営
N J 19	4	3	1	長男が昆明で出稼ぎ
N J 20	6	3	3	次女が県内で出稼ぎ
N J 21	5	3	2	長男次男が昆明で出稼ぎ
N J 22	6	4	2	長男が玉溪で出稼ぎ
N J 23	4	2	2	長女が県内で出稼ぎ
N J 24	5	2	3	長女が県内で出稼ぎ
N J 25	7	2	5	世帯主が村で竹細工
N J 26	4	3	1	弟が上海で、長男が県内で出稼ぎ
N J 27	7	3	4	世帯主が県内で出稼ぎ
N J 28	4	3	1	長男と次男が大学生

(2010年8月8日の現地調査により)

いた。これらの土地は名目上<sup>6</sup>では山林になっているが、サトウキビを栽培する農家もある。

村は2000年から農業構造の調整を乗り出した。サトウキビの栽培面積を減らし、傾斜地では退耕還林を進めた。陸稲とその再生稲、そしてトウモロコシと晩稲との2毛作の導入を促した。また、村は2000年に130畝の台湾青稟を導入して、2001年に20万円の利益が得られ、1戸当たり3,700円の収入もあった。2001年に150畝の台湾青稟を新たに栽培し、2,676株のレイチも導入した(王、2002)。

伝統的な作物から商品作物にシフトすることによって土地生産性と労働生産性を高める。南碱村の自然条件は熱帯果物と冬野菜の栽培に適している。レイチ・台湾青稟・マレー桃・蓮霧などの果物、そして約100畝の冬野菜が実験的に栽培されている。村近くの広節山の麓に30畝の池が作られ、魚やカモが養殖され、週末

になると近くの工場労働者が釣りに来る。

筆者が2010年8月8日に行なった現地調査によれば、南碱村は花腰傣の自然村で、農家57戸、総人口276人、うち男142人、女134人であった。表1は兼業農家や大学生のある農家を抽出してまとめたものである。それによれば南碱村には総農家数の約50%の農家は兼業農家である。28戸の兼業農家の中で、県内での出稼ぎ労働者が最も多い。遠くまで省都の昆明市、さらに上海市への出稼ぎ労働者がいる。

一方、この村から4人もの大学を送り出している。村には小学校がない。行政村である曼蚌村民委員会の所在地曼蚌には曼蚌小学校があり、村の子供は徒歩で約1時間をかけて通っている。学校に宿舎があり、子供たちは下宿している。中学校となると、腰街鎮にある腰街中学校まで行かなければならない。教育環境は決してよいと言えないが、村から4人の大学生を送り

出しており、教育熱心な村として名声が高い。

筆者は二人の息子を大学生までに育てた刀文良さん(46才)にインタビューした。ごく普通の花腰俵の家族で、2畝の水田、10畝の畑、30畝の山林を持ち、妻と二人で農業を営んでいる。長男は名門蘭州大学を卒業し、上海の会社に就職し、雲南大学に通っている次男にも経済援助している。息子たちはローンで授業料を借りて、卒業後に返済する。しかし、大学生の2人に仕送る生活費だけでも約1,000元/月・人が必要で、4年間で約9万円がかかると刀さんはいう。次男は2009年6月に卒業、公務員試験を受ける予定だった。

### 3. 事例農家

現地調査では家族規模、経営状況および出稼ぎなどの面で、57戸の農家から特徴的な農家を4軒選んで聞き取り調査を行った。いずれも花腰俵であった。以下では2009年8月に行なった調査の結果を述べておく。

#### (1) 事例農家Aさん

Aさんは50歳で竹細工の職人で、妻が昨年死別し、現在長男(25才)と長女(23才)と暮らしている。長男は村近くの水力発電所で仕事している。給料は最初400元/月で低かったが、今は700元~800元/月をもらっている。長女は2009年旧暦の6月16日に県庁所在地の町へ嫁ぎ、村を離れた。

2009年現在、水田は4畝(うち、水稻3畝、レイチ1畝)、畑は18畝で全部トウモロコシを栽培している。1990年から1995年までサトウキビを栽培し、最も多い時8畝であった。また、1995年から2005年まで台湾青棗を1畝栽培した。現在、豚を2頭飼っているが、他の家畜は飼育していない。2008年の年間収入は2,000元~3,000元という。

A農家にはバイク1台、カラーテレビ1台、携帯電話2台がある。数年前までは固定電話<sup>7</sup>を持っていたが、便利な携帯電話を持つようになってから固定電話を解約した。

この農家は竹細工の職人で、その技術も評価されている。民族民間空間という会社の支店が腰街鎮にあり、その会社から竹細工の技術指導に来てほしいとの要請があったが、月給はわずか800元なのでAさんは断った。本当は竹細工をやり続けたいが、売上が少ない。農家だから農作業もやめられないという。

#### (2) 事例農家Bさん

B農家は1995年に本家から分家した。Bさんは42才で、中学校1年で退学。妻は42才で小学校卒業。父(62才)と母(60才)は別世帯の弟と暮らしている。19歳の長男は江蘇省の大学で勉強し、14才の次男は2009年9月に新平民族中学校に入学の予定であった。

2008年現在、水田2.2畝、畑15畝、山林2畝を経営している。栽培作物はサトウキビ11畝、トウモロコシ4畝、水稻0.7畝(早稲と晩稲)、果物用サトウキビ1.5畝(水田に栽培)。サトウキビの販売先は近くの河口製糖工場<sup>8</sup>に持って行って、買ってもらう。この製糖工場は「雲新」という商標の砂糖を作っている。

2000年から台湾青棗を栽培しはじめ、最も多い時、棗の木が44本で面積にして約1畝であった。一年目の収穫が少なかったが、市場価格は高かった。アヒルの卵ぐらいの大きい青棗なら18元/斤であった<sup>9</sup>。B農家は100斤を収穫して、約1,000元の収入があった。2005年以降、青棗の市場価格が暴落したため、木を伐採して栽培をやめた。当時、化学肥料も50kgで約700元~800元もしたため、青棗の栽培に利益がなかった。

豚を2匹飼っている。1匹を市場に売り出す。もう1匹は「年豚」として傣歴の新年に食べるという。この辺りの花腰俵の家は大抵豚2匹を飼っている。2008年に子豚2匹を買うのに1,400元もかかった。2009年に価格が下がり、1,100元で買える。Bさんは役畜として牛を飼っていない。農耕の時、本家の水牛を使っている。

1997年にテレビを購入した。2004年に冷蔵庫を購入、現在故障で使用していない。2009年に中古のバイクを購入し、2,800元かかった。固定電話は2004年までに使っていた。Bさんは2000年に1台目の携帯電話を購入し、機種変更などで現在は3台目を持っている。現在、家族全員が携帯電話を持っている。

長男の大学の学費は4年で24,000元、それに月々の生活費は約1,000元もかかる。教育費が一番大きな支出になっている。

#### (3) 事例農家Cさん

Cさん46才、妻46才。水田2畝、畑10畝、山林30畝を請け負って、妻と2人で農業を営んでいる。Cさんの畑は2か所にあり、1km範囲内に分布している。栽培作物は主にサトウキビである。1980年代から現在まで約10畝を安定的に栽培してきた。畑1畝当たり6ト

ンのサトウキビが取れるので、Cさんは年間60トンのサトウキビを生産している。販売先は村近くの河口製糖工場である。価格は250元/トンで、Cさんの収入は15,000元になる。製糖工場までの輸送は工場から委託されたトラックが運んでくれる。

また、果物用サトウキビの市場価格が製糖用サトウキビより高いため、2009年から0.5~0.6畝を栽培し始めた。水田に2畝の交配水稻を栽培している。2001年から台湾青棗1畝を栽培してみたが、市場価格が不安定のために2004年にやめた。この他に、白菜やジャガイモなどの自家用野菜を栽培している。

C農家は水牛を飼っていないが、農耕の時、親戚(妻の兄)の水牛を無償で使っている。ちなみに、この村では水牛を1日借りる場合は約60元がかかる。

大学生の息子への仕送り、1994年~1995年の家の新築工事などで、C農家は現在銀行から4,000元、親戚から2万元を借金している。

#### (4) 事例農家Dさん

D農家は6人家族である。家族構成は、Dさん53才(曼蚌小学校卒業)、妻55才(文盲)、長女30才(腰街中学校卒業)、娘婿31才(腰街中学校卒業)、次女25才(新平第一中学校(高校)卒業)、長女の長男4才、である。

D農家に水田が3.8畝、畑と山林が30畝ある。はっきり区別しなくて、山林の一部を開墾してサトウキビの

栽培面積を拡大したという。主な作物は水稻2.3畝、果物用サトウキビと野菜で1.5畝、サトウキビ26畝(生産責任制以降、栽培面積を上げた)。その他に豚を6匹、鶏8羽を飼っている。

南碱村は積算温度が高いため、気温による農作業の制限はあまりない。主な作物について次のような農業カレンダーになっている。水稻は2期作で、2月に田植え、6月に稲刈り、さらに2期目は7月に田植え、10月に稲刈りする。果物用サトウキビは12月に植えつけ、翌年の10月に収穫する。製糖用サトウキビは1月~3月の間に植えつけ、12月~翌年4月までに刈り入れする。

1978年に人民公社解体、個人請負制が導入されてから、Dさんの収入は年々増えてきた。1980年の年間収入を100とすると、1990年は130、2000年は230、2009年は700であった。とくに2004年に食糧拋出制度が廃止されてから、農家の経営がさらに自由になった。制度改革は農家収入の向上を促進した。

また、旧村改造に伴い、D農家の家は移築対象となった。2002年に3.5万元をかけて、延べ床面積160㎡の家を新築した。そのため信用金庫と親戚から借金をした。

#### 4. 農村景観の変化

図3に示したように、昔の南碱村は自然発生的に形成した集落のため、農家の土掌房は無秩序に配置している。王(2008、p63)によれば、村の中の道路は極

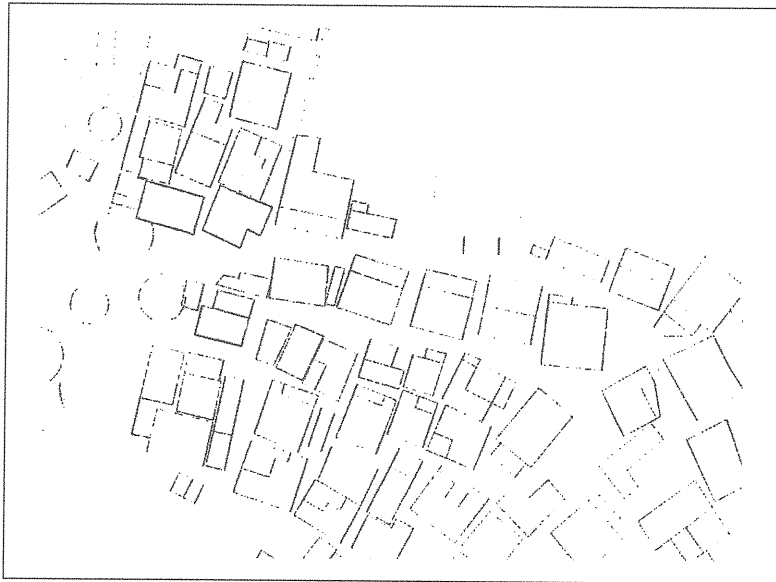


図3 南碱村における旧村改造前の自然発生的な家屋の配置  
(蔣・呂、2002の一部を引用)

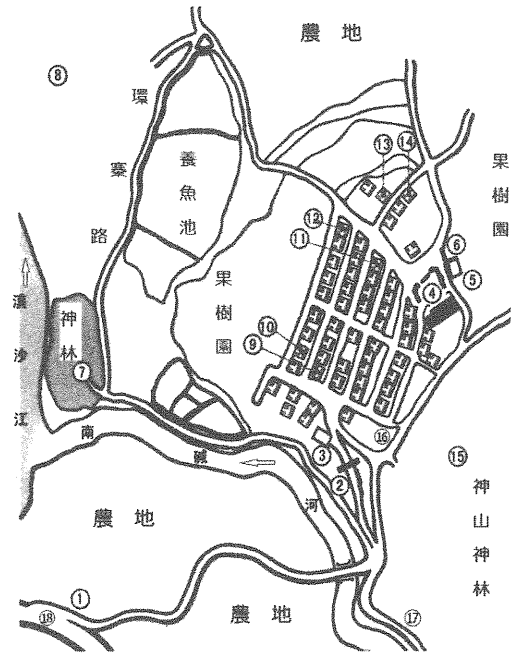
めて狭かった。上水道もトイレもなく生活は大変不便であった。前村長刀文成さんにインタビューしたところによると、以前、土掌房と土掌房との間に狭い道しかなく、大きな角を持つ水牛なら通れないほど道幅が狭かった。水牛も学習していて、狭い道に入ると、顔を横にして上手に通るようになった。また舗装していなかったため、雨の時は泥道になり女性や子供が通れなかった。

この状況に対して建築学者による現地調査と分析によって花腰傣の独特な建築文化を保存しながらも現代生活に対応できる旧村改造の提案がなされた。土掌房の保存状況によって、保護的に改築するものと建て直すものに分けた。前者についてそれぞれの家にトイレとシャワー室を設置することを薦められた。後者について移築は14戸、部分改築は13戸であった。さらに、5.6万円を投資して、村の入口<sup>10</sup> および村の一番奥に水洗トイレを設置した。これによって、村の衛生環境が大幅に改善された(王、2008、pp64-68)。

旧村改造の結果、1999年に村の中に1本目の道路が完成した。2001年に縦4本、横4本の村内道路を完成した。その後、4本の幹線道路ができた。2006年に村の入り口から省道306号までの村専用道路を舗装した。この道路工事は新平県政府と腰街鎮政府からの40万円の財政的補助と村民の無償労働によって完成した(王、2008、p66)。村の中の整備がほぼ完了した時期に、現村長の白紹福さんは村を囲む環寨路(図4)をコンクリートで舗装することを計画した。村長は腰街鎮政府から20万円の財政的援助を取り付けた。そして村民のボランティアを動員して、2010年3月から5月にかけて長さ900mの環寨路の舗装工事を完成させた。これによって、雨の日でも村外の神山神林まで行けるようになった(2010年8月現地調査による)。さらに、南碱村の近くを通る新平県から双柏県までの国道の拡張工事が行なわれ、2011年8月に完成する予定である。白紹福村長の話によれば、この道路が開通すれば、農家はバイクを使って約1時間で県庁所在地の桂山鎮まで野菜を運べるようになる。今まで腰街鎮の農貿市場より野菜が高値で取引されるので、道路の開通に対する期待も大きい。

## 5. 伝統民家土掌房の変化

新平県の花腰傣は独特な土掌房に暮らしている<sup>11</sup>。以前、南碱村には46軒の土掌房があった。自然発生的に



- ①村の入口と標識、②寨門と水車、③公衆トイレ、  
④花腰傣文化伝習館と祭祀樹、⑤公衆トイレ、⑥水車、  
⑦神林神山、⑧河川敷(南碱灘)、⑨伝統土掌房、⑩竹細工の家、  
⑪刺繍の家、⑫竹細工の家、⑬紡績の家、⑭刺繍の家、  
⑮野生稲の分布地、⑯祭祀小屋、⑰水力発電所、⑱省道306

図4 南碱村における民家と施設の配置  
(孫・胡(2008、p74)および現地調査より作成)

形成したため、土掌房の配置は無秩序に並べていた(図3参照)。斜面に寄り添い、屋根に起伏がある。遠くから見れば壮観である。

土掌房は現地で取れる土を用いて作る。外壁の厚さは45cmに達して、断熱性が高い。窓が少なく小さいため暑い外気の侵入を防げる。同時に室内の風通しが悪いし、室内に光があまり入ってこないため昼間でも暗くて、照明が必要である。

写真2の右側の建物は花腰傣の典型的な庭と土掌房である。庭に入ると、真正面にあるのは2階建ての土掌房である。土掌房の1階部分は神棚や祭壇、寝室、リビングルーム、キッチン、物置と作業場などが配置されている。1階は家族の最も重要な場所である。土掌房の2階部分については、約3分の2が穀物倉庫や物置として個室が作られている。残りの約3分の1の面積はテラスで、そこで穀物などを干したり、そこに簡易ベッドを置いて暑い夜を凌ぐ人もいる。

また、庭の入り口から見れば、左側に一階建ての建物があり、寝室か物置として使う。右側にトイレ、シャ



ワー室と鶏小屋などがある。

土掌房建築の基本資材は石・土と木材である。しかし、建築用木材の入手がより困難になり、これに加えて外来の建築文化の影響もある。村では最近、煉瓦・コンクリートと鉄筋を使った、新しいデザインの「土掌房」が増えてきた。しかし、土掌房は花腰傣の伝統的建築である。土掌房という住文化を継承・保護することは大切だと鄭・曾（2007）が指摘している。

写真2の左側にある新築の煉瓦づくりの民家であるが、建築資材が異なるが、建物のデザインや間取りはあまり変わっていない。やっぱり土掌房のスタイルは花腰傣の伝統的生活にマッチしているといえよう。

## 6. 花腰傣の民族衣装の変化

このあたりの傣族を花腰傣と呼ばれている理由は、その衣装の独特な特徴から由来する。花腰傣の女性の衣装はその腰帯が一本の長くてカラフルな帯状の布を巻いてできたものである（熊ほか、2007、p 226）。

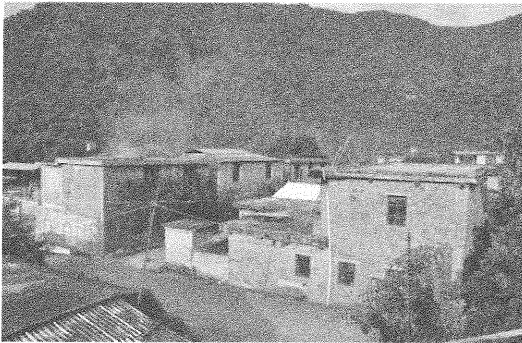


写真2 南碱村の民家（右は伝統的な土掌房、左は煉瓦づくりの民家）  
（2010年8月、南碱村にて張撮影）

村の成人女性はみんな木製の機織機で傣族の錦を織れるし、錦に綺麗な装飾を刺繍することもできる。女性の服装から花腰傣の歴史・特性・文化の地域性および美的意識を見ることができる（王、2008、pp8-9）。現在、結婚式、葬式、「趕花街」などのような年中行事以外、普段は花腰傣の民族衣装を着る人は珍しい。写真3はフィールドワークの時、村の女性に花腰傣の衣装を着替えしてもらい、撮らせてもらったものである。花腰傣の衣装は日本の着物と同じく、一人で着装することができなくて、着付け師の助けが必要である。

南碱村では、花腰傣の年配女性は花腰傣の服装を着る人が見かける（写真4）。しかし、若い人は普段着として漢民族の服を着る。服装から民族を識別することは難しくなってきた。とくに村の若者はテレビ放送や出稼ぎ先から帰郷した人の影響で、漢民族の服装を選ぶ傾向が強い。彼らはジーンズを穿くなどで、漢民族の若者とあまり変わらない。写真5は獲ってきた魚を分け合う村人であるが、花腰傣の民族衣装を着ている



写真3 花腰傣の民族衣装  
（2009年8月、南碱村にて張撮影）



写真4 家禽を追う花腰傣衣装の老婦人  
（2009年8月、南碱村にて張撮影）



写真5 花腰傣の人々  
（2009年8月、南碱村にて張撮影）

のは右側にいる裸足の年寄りの女性だけであった。

したがって、南碱村では花腰傣の民族衣装は一種の日常的な生活用品ではなく、年中行事と冠婚葬祭に結び付ける時限的なものであり、年寄りの女性に限定された特別なものである。一方の県庁所在地の町では、花腰傣の民族衣装はこの地域の象徴として広告のイメージに使われている。政府の刊行物や観光パンフレットなどにも花腰傣の写真がよく用いられている。

## V. 南碱村の変化と今後の展望

南碱村の変化は、2000年まで遡る。南碱傣族文化生態村を設置するために、建築学・文化人類学・民族学・生態学・造園学等の分野の専門家は2000年に南碱村で約1ヶ月の現地調査を行ない、『新平県南碱文化生態資源調査』と『南碱傣族文化生態村建設項目建議書』といった提案を提出した(王, 2002)。この提案を基礎に、村民は主導的に行動し、専門家の支援と政府のサポー

トによって、旧村改造と農業改革を着手した。今までの成果が得られた。

(1) 村落の中の道路整備及びそれに伴う古民家土掌房の移築・改築と新築をはじめ、トイレ、シャワー室、家畜小屋、沼気池(メタン)などの新設、更に電気・上水・電話などのインフラも整備の対象となった。これらの整備によって集落の景観のなかに伝統的民居である土掌房は一層美しくなった。この中、移築した土掌房は14軒、改築は13軒であった。村民の協力なしには達成できなかったことであった。

(2) 農地灌漑水路の整備。幹線水路1本、水路5本、田んぼ内に主要水路2本、村を囲む環状水路1本を作った。また、農道を5本も整備した。これによって、農地の灌漑・肥料や作物の運搬の条件が改善され、214畝の農地は安定した単収が得られるようになった。

(3) 水稲とサトウキビに依存した単一の農業の構造調整。斜面の林地でのサトウキビの栽培をやめて、退



(a) 花腰傣文化伝習館



(b) 村の神林



(c) 伝習館前の広場で刺繍する女性たち



(d) 竹細工

写真6 花腰傣の民族文化の発掘と継承  
(2010年8月、南碱村にて張撮影)

耕還林を行う。陸稻とその再生稻、そしてトウモロコシと晩稻との2毛作の導入を促した。また台湾青棗など、村の気候に適した熱帯果物の栽培を導入した。さらに水に近い地の利を生かして、魚の養殖やアヒル・ガチョウの養殖も奨励し、多角経営を展開してきた。

(4) 花腰傣の民族文化の発掘と継承。南碱村には言語・宗教・祭日・口頭伝承・民謡・舞踏・衣装・刺繍・食文化・土掌房など豊かな民族文化があり、その発掘・継承と発展は最も大事なことである(写真6)。新しく建設した花腰傣文化伝習館は花腰傣文化の象徴的な空間となった。南碱村の村民が主体となり、文化の商品化を反対しつつも、その発掘と継承の在り方を模索している。

南碱村の発展はその自然条件や地理的位置、豊かな民族文化からヒントを得ることもできる。南碱村の将来について提案した研究者の存在や新平県や腰街鎮政府の支援も重要な外的条件である。さらに、花腰傣というアイデンティティによって結束された村人、さらに村人を束ねるリーダーの存在は最も重要な内的要因である。そのキーパーソンは筆者がインタビューした前村長刀文成さんと現村長白紹福さんである。彼らは村の歴史を知り尽くしており、村のことを誇りに思っている。伝統を重んじながらも現在の農村環境に相応しい経営や技術の導入を積極的に進めている。南碱村においても、他の農村地域と同様に、若年労働者の村外流失、高齢化、農産地間の競争の激化、外来文化の移入、また少数民族文化の商品化の動きから花腰傣の文化を守ることなどは多くの課題に直面している。

この小論を平成23年3月に愛媛大学法文学部を定年退官される藤目節夫教授に謹んで捧げます。

なお、本稿は2008年度から2010年度科学研究費補助金基盤研究(B)「中国雲南省における少数民族地域の変容に関する人文地理学的研究」(研究代表者:張貴民、課題番号20401043)の研究成果の一部である。現地調査の際に南碱村の村民の皆さん、そして現村長の白紹福さんや前村長の刀文成さんに大変お世話になった。ここに記して感謝するものである。

## 参考文献

- 王 国祥(2002):南碱傣族文化生態村。尹 紹亭編『民族文化生態村——雲南試点報告』、雲南民族出版社、213-256。
- 王 国祥(2008):『民族文化生態村——当代中国応用人類学的開拓 探索実践之路』、雲南大学出版社、173 p。
- 鄭 嘉・曾 茜(2007):変遷中的傣族伝統建築文化及応対措置——以新平傣族土掌房為例、楚雄師範学院学報、2007年第5期。
- 蔣 高宸・呂 彪(2002):村落規劃与民居改良。尹 紹亭編『民族文化生態村——雲南試点報告』、雲南民族出版社、230-244。
- 新平県文化事業局・新平県文学芸術界連合会編(2005):『中国・新平花腰傣之郷』、雲南美術出版社。
- 新平県旅游局(2005):『花腰傣之郷——新平体験游』、雲南大学出版社、92 p。
- 孫 琦・胡 仕海(2008):『民族文化生態村——当代中国応用人類学的開拓 生態村的伝習館』、雲南大学出版社、152 p。
- 中国大百科全書総編集委員会『中国地理』編集委員会(1993):『中国大百科全書 中国地理』、中国大百科全書出版社、867 p。
- 中国国家统计局(2009):『中国統計年鑑2009』、中国統計出版社。
- 中華人民共和國民政部編(2006):『中華人民共和國行政区划簡冊2006』、中国地図出版社。
- 趙 延光(2007):『雲南少数民族社会跨越發展研究』、雲南大学出版社、154 p。
- 張 長(2000):第三種傣族。雲南文史叢刊、2000年第3期。
- 『民族工作手冊』編集部(1985):『民族工作手冊』雲南人民出版社、759 p。
- 童 紹玉・陳 永森(2007):『雲南壩子研究』、雲南大学出版社、276 p。
- 羅 陽(2007):『傣族社区与發展』、四川大学出版社、278 p。
- 熊 術新・苗 民・孫燕(2007):『中国雲南兩個少数民族村落影像民族誌——民族文化在傳播中的意義蛻變』、雲南大学出版社、225-240。
- 劉 江(2006):新平花腰傣社会文化調查。和 少英編『社会文化人類学叢書 第Ⅱ卷 雲南特有族群社会文化調查』、雲南大学出版社、39-63。

## 注

- 1 『傣族簡史』編集部 (1985) : 『傣族簡史』、雲南人民出版社、p 4。
- 2 盆地のことである。雲南省では壩子という。詳しく董・陳 (2007) を参照されたい。
- 3 傣語では「卡」とは漢民族の意味である。「傣卡」とは漢民族と融合してできた傣族のことであり、主に漠沙鎮と腰街鎮に暮らしている。「傣雅」とは歴史上の民族大移動の際に残された傣族のことであり、主に漠沙鎮に分布している。「傣洒」とはサンドビーチに住む傣族のことであり、主に戛洒鎮と水塘鎮に集中している (新平県旅游局、2005)。
- 4 花腰傣網<http://www.huayaodai.cn/index.asp>、2010年12月10日閲覧。
- 5 新平県あたりでは元江、南碱村あたりでは漠沙江と称している。
- 6 各農家に発行されている「林権証」には林地として記載されているが、実際は傾斜の緩いところはサトウキビ畑として使われる場合が珍しくないという。
- 7 王 (2008) の調査によると、南碱村は2003年に46軒の農家に固定電話があり、全世帯の90%以上を占めるようになり、有名な電話村になった (王、2008、p 68)。しかし、便利な携帯電話の普及により、固定電話の解約は相次いだ。
- 8 新平県糖業有限公司に所属する河口製糖工場である。隣接する漠沙鎮にも同社所属の漠沙製糖工場があり、すでに1965年から稼働している。
- 9 重さの単位で、1斤は0.5kgである。
- 10 村の入口を「村頭」といい、村の一番奥を「村尾」という。南碱村では、昔から村を守るために村頭村尾にそれぞれ「神房」が祭られている。現在、村頭村尾にそれぞれ水車も設置されている。なお、村落空間の宗教的意味に関しては王 (2007、p 142) の研究は詳しい。
- 11 この辺りの彝族も傣族も土掌房に住んでいる。雲南日報社編 (1984) : 『雲南——可愛的地方』pp469-470によれば、雲南省南部の峨山県・新平県・元江県・金平県などでは、彝族も漢族も土掌房に居住することがある。なお、よく知られている西双版纳の傣族の住居は「干欄」と呼ばれるもので、新平県の土掌房と異なる。